

野ウサギ

なにを眺め

なにを見落としているのだろうか

しゃがむと

野ウサギはまだあたたかかった

純白の腹と灰の毛並み

息をひきよせようと

身体をのばしているかのように見えた

あと数分でついでてしまう

野のむき出しの魂

市街では知ることのない存在が

ハイウェイにかかる孤独な橋で

あらゆる関係からほどけて

ひとりで去っていく

わたしは立ち上がり

そのまま白鳥山の森にはいって

クモの巣をはらった

山頂は見つからなくて

だれともすれ違わなかった

また枝を踏み、もとの橋にさしかかる

さっきの野ウサギがない

ハイウェイの速度は

どこまでも湧きあがっていく

晴れやかな空に

はるか一羽、鳶が旋回している